

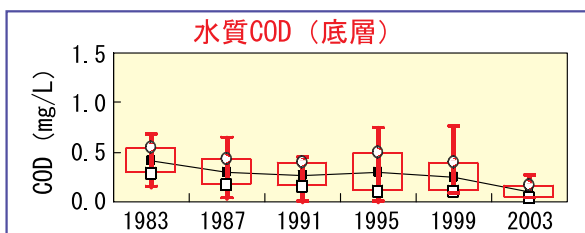
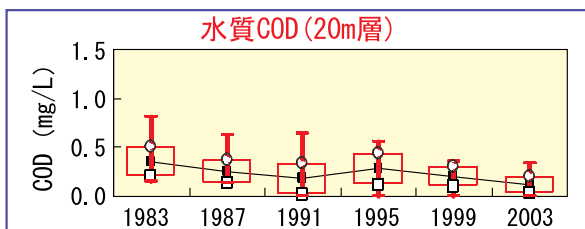
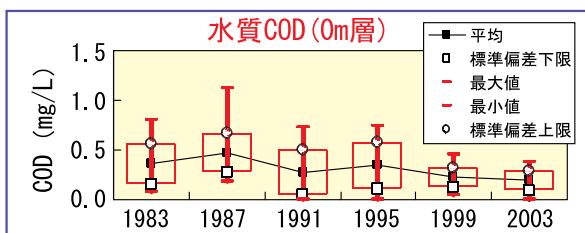
陸奥湾の汚染は進行しているか？ —平成15年度水質・底質の調査結果—

浅海環境部 総括主任研究員 今井 美代子

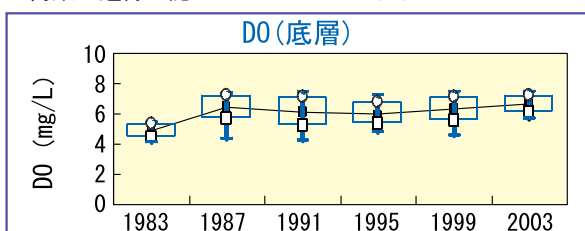
当所では、陸奥湾の漁場環境の保全を目的として1979年から県独自の調査（陸奥湾漁場保全対策基礎調査・4年毎の9月）と1996年から水産庁の全国統一の調査手法による漁場環境調査（漁場環境保全推進事業・毎年）を実施しています。

今年度は陸奥湾漁場保全対策基礎調査の7回目の調査年であったことから、その結果を報告します。

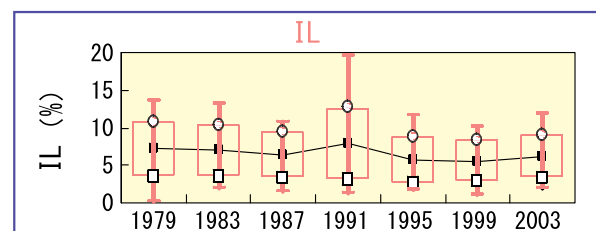
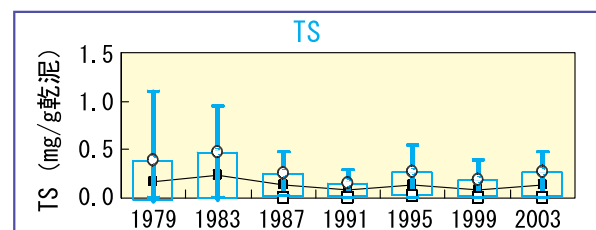
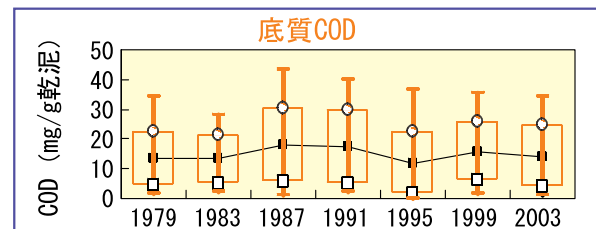
水質調査（湾内20地点）項目の**水質COD（化学的酸素要求量）**は水質の汚染の直接の指標ですが、図のように、0m層、20m層、底層とも大体横ばいから幾分低下傾向を示し、ほぼ良好な水質環境を保ってきたといえます。



底層の**DO（溶存酸素量）**の低下は底質の悪化の指標となりますが、1983年からの調査結果の推移に示すとおり、湾全体で概ね横ばいで推移していること、水産用水基準の**4.3mg/l**を下回ったのが、1991年の2地点だけであったことから、DOの推移からみれば、底質の汚染の進行は認められませんでした。



次に、底質調査項目（湾内42地点）ですが、**COD（化学的酸素要求量）**、**TS（全硫化物）**、**IL（強熱減量）**が、底質汚染の指標となります。これも水産用水基準では**COD : 20mg/g**、**TS : 0.2mg/g**がそれぞれ汚染の始まりとされていますが、湾全体で見るとこの基準を上回る地点があるものの、その地点数は近年減少傾向にあること、各調査点ごとにみても測定値の上昇がみられないことなどから、こちらも汚染の進行は認められない結果となっています。



以上のように、今年度の調査結果を含めて、これまでの推移を検討した結果、陸奥湾の水質、底質の有機物による汚濁については、その進行は今のところはみられず、わずかながら改善傾向もみられます。

しかし、海水交換の悪い漁港内の汚染や海岸の漂着ゴミの増加等が続けば、これまでその自浄作用によって、バランスを保っていた陸奥湾の漁場環境が、一気に悪化する危険性が消えたわけではありません。

底質の有機汚染が進行すると、底層の酸素がなくなって、底魚類や地まきホタテガイの斃死を招くおそれがあります。それがさらに進むと、酸欠の海水が海の上層まで達して沿岸の生き物を殺す「青潮」が発生したり、水質の汚染が進んで富栄養化し、南の海のように「赤潮」が大発生すると、養殖ホタテ貝等の斃死のおそれもあります。

今後関係者それぞれの「陸奥湾を汚さない努力」を忘れないようお願いします。